

器楽（室内楽を含む）

渡辺 和

コロナ禍から足かけ4年が過ぎた2025年は、ウクライナ戦争やイスラエル、米合衆国新政権による国際情勢の不安定さが続くとはいえ、器楽室内楽界には新秩序が見え始めた年となった。

◆ソロリサイタルからフェスティバルへ

コロナ禍後の器楽室内楽ジャンルで変化が著しいのは、サントリーホール、大阪フェスティバルホール、東京芸術劇場、ザ・シンフォニーホールなど1200から2000席規模ホールでの単発リサイタルのあり方だろう。世界を飛んで歩き定期的にCDリリースする外来ピアニストで大ホール独奏を行ったのは、イーヴォ・ボゴレヴィッチ（所沢市民文化センターミュージズ1月26日、サントリーホール1月29日他）、スタニスラフ・ブーニン（高崎芸術劇場1月19日、盛岡市民文化ホール1月25日、ザ・シンフォニーホール11月30日他）、ラン・ラン（サントリーホール2月6日、ザ・シンフォニーホール同10日）、ミハエル・プレトニョフ（愛知県芸術劇場5月31日、ミュゼザ川崎6月8日他）、アリス＝沙羅・オット（サントリーホール6月29日、愛知県芸術劇場7月1日他）、イェフィム・ブロンフマン（東京オペラシティ9月16日）、レイフ・オヴェ・アンズネス（オペラシティ10月30日、兵庫県立芸術文化センター11月3日他）、内田光子（サントリーホール10月28日、同30日他）、イゴール・レヴィット（ミュゼザ川崎11月25日他）、クリスティアン・ツイメルマン（ミュゼザ川崎11月26日、サントリーホール12月3、8日他）など数少ない顔ぶれ。アーシュラ・オッペンズ（五反田文化センター6月20日）、アンヌ・ケフェレック（武蔵野市民文化会館小9月1日、浜離宮朝日ホール同2日）、アブデル・ラーマン・エル＝バシャ（浜離宮朝日ホール10月15日）など玄人好みの巨匠クラスは、中小規模ホール開催が当たり前となる。ちなみに大ホールでの弦楽器奏者独奏ツアーは、ヨーヨー・マ（アクロス福岡9月17日、愛知県芸術劇場9月19日、サントリーホール9月20日）くらいだった。

大ホールは、コロナ禍以降にSNS展開を巧みに利用、新たな聴衆層獲得に成功した若手の大型ライブ会場に変貌しつつある。辻井伸行（サントリーホール2月19日、20日、3月3日、ザ・シンフォニーホール3月9日、札幌コンサートホール3月16日、福岡市民ホール5月24日、他）、反田恭平（サ

ントリーホール11月29日、12月12日、大阪フェスティバルホール12月1日、他）、角野隼斗（サントリーホール2月22日、他）、外来奏者では秋のショパン国際コンクール優勝のブルース・リウ（ミュゼザ川崎3月17日、オペラシティ同18日）、イム・ユンチャン（オペラシティ7月7日）などが、異次元の動員力を示した。11月29日の角野隼斗のKアリーナ横浜公演は前年の武道館公演13,000枚を上回る18,546枚を販売、「屋内のソロピアノリサイタルで販売されたチケットの最多枚数」としてギネス記録となった。

外来室内楽団に関しては、中国、台湾、韓国のみでツアーを行うジャパン・パッシングや渡航費難で来日中止となる団体もあり、日本経済弱体化の現実を突き付けられつつある。そんな中、欧州現役両横綱の共演たるベルチャ Q&エベヌQ（トッパンホール3月28日、神奈川県立音楽堂3月29日）、コロナ禍で中止となった来日を日本在住作曲家テリー・ライリー生誕90年記念としてクラウドファンディングで実現したクロノスQ（神奈川県立音楽堂6月25日、東京藝大奏楽堂6月28日）などは、室内楽ファンを超えた話題となった。

内外の巨匠中堅クラス奏者が集う室内楽は、ホール主催の特別公演や音楽祭などの一部として提供される傾向が明らか。詳細に触れる余裕はないが、東京・春・音楽祭（3月14日～4月20日）、宮崎国際音楽祭（4月20日～5月18日）、別府アルゲリッチ音楽祭（4月20日～7月13日）、金沢ガルガンチュア音楽祭（4月27日～5月5日）、ラ・フォル・ジュルネTOKYO（5月3日～5日）、草津音楽祭（8月17日～30日）、大阪クラシック（9月14日～20日）、仙台クラシックフェスティバル（10月3日～5日）等の大規模総合音楽祭は、数多くの器楽室内楽公演を用意した。室内楽特化の音楽祭としては、サントリーホール・チェンバーミュージック・ガーデン（6月7日～22日）、霧島音楽祭（7月18日～8月3日）、ゆふいん音楽祭（7月25日～27日）、木曾音楽祭（8月28日～31日）、ル・ポン国際音楽祭赤穂・姫路（9月27日～10月4日）、TOPPANホール25周年室内楽フェスティバル（10月2日～8日）、ARK Hills Music Week（10月3日～12日）、北九州国際音楽祭（10月18日～12月7日）、NAGAREYAMA国際室内楽音楽祭（11月1日～3日）等、会場となるホールや地域公益文化財団や実行委員会が主催し、音楽監督を務める奏者を軸に数多くの室内楽が披露された。木曾やゆふ

いん、草津など半世紀もの歴史がある室内楽音楽祭はそれぞれに変革期を迎えつつあり、運営組織の世代交代が大きな課題となっている。

なお、今世紀0年代から続く室内楽器演奏会場の個人経営小規模サロンへのシフトはますます顕著で、上述のホール主催音楽祭は音楽ホールそのもののサロン化とも言えよう。東京に於ける小規模サロンの草分けにして現代音楽の重要拠点ともなっている両国門天ホール代表黒崎八重子の令和7年度文化庁長官表彰受賞は、小規模ヴェニユからの発信の重要性の社会的認知として大いに喜ばしい。

◆世界スタンダードの中での室内楽

宗次ホール弦楽四重奏コンクール（6月28、29日）は、弦楽四重奏専門国内大会として秋吉台と並び貴重な存在である。7年ぶり5度目の開催となった今回、初の海外団体としてベルリン拠点のヴァリオンQが参加、Q風雅と優勝を分けた。多言語対応はないものの規定に国籍制限はなく、岐阜出身の姉弟がヴァイオリンに座る団体の参加に問題ないとはいえ、想定外だったことも事実だろう。

実質上国内に室内楽教育システムがない中韓では珍しいものの、コロナ禍前までは外国拠点で室内楽キャリアを試みた日本出身団体は東京QとロータスQのみだった。一昨年に北米で学ぶQインテグラのチェロが韓国国籍奏者に交代、去る秋には北米からハノーファーに拠点を移す。9月のバンフ国際弦楽四重奏コンクールで日本団体最上位3位を獲得し注目を浴びるQ渾も、東京音大からザルツブルク・モーツァルテウム音楽院に学ぶ課程で中国籍ヴィオラを抱えている。

これらの多国籍アンサンブルが本格的にプロとして活動を始めるには、国境移動や税制上の煩雑な業務など若いヴェンチャー・ビジネスの能力を超えた難題が山積する。誕生しつつある「国際的」室内楽グループをどう日本のマーケットが受け入れ、育てていけるか、活況を取り戻したかに見える日本の器楽室内楽界は新たな課題を突きつけられている。

渡辺 和（わたなべ・やわら）

宗教音楽、室内楽を中心に、演奏会プログラム執筆、音楽芸術エッセイ執筆、演奏家インタビュー、翻訳、通訳など、フリー音楽ジャーナリストとして活動。コンクール、音楽祭、シンポジウムなど、海外取材多数。国際基督教大学大学院比較文化研究化修士課程修了（比較宗教表現論専攻）。1957年千葉県生。コロナ禍以降、東京と大分の二拠点生活中。主な著書：クアルテットの名曲名演奏（音楽之友社）、ゆふいん音楽祭35年の夏（木星社）、クラシックホールをつくる、続ける（水曜社）